

実践まとめシート（2年次）

研究グループ	高等部	実践グループメンバー	小林、藤田、米持、有馬
--------	-----	------------	-------------

実践タイトル		
学校と地域を学びの場としたボッチャ教室による健康教育の実践事例ー学びを生かすサイクルを通してー		
I 問題と目的		
本実践は1年次からの継続した取り組みである。1年次では、「自分や地域の人々の健康のためにできることを考えて行動しよう」をテーマとし、地域のスポーツジム主催のボッチャに関する健康イベントで地域の人と触れ合う機会を得た。ある生徒は、この活動を通じて自分の役割を見出し、1回目のイベントでの経験を振り返って2回目に向けた目標を設定し、当日は主体的に行動することができた。このように、学校と地域を学びの場として、学びを実践に生かすサイクルを通じて、生徒エージェンシー「目標を設定し、振り返り、責任ある行動をすることによって変化を起こす力」（OECD, 2018）が発揮されたと考えられた。 一方で、生徒エージェンシーの発揮に作用する共同エージェンシー「学習者が目指す目標に向かって進んでいくことを支える、双方向的で互恵的な協力関係」の高い段階では、生徒がプロジェクトを主導し、同級生や教師、地域の人との相互の関わり合いの中で意思決定や行動を決めていく。1年次の取組では、教師が提案したプロジェクトの方向性を基に授業が進み、地域主催のイベントに協力して参加する展開であった。このことから、共同エージェンシーの段階としてはまだ低い状態にあると考えられる。 以上より、1年次に継続して、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルを展開するとともに、必要な環境設定を行うことで、共同エージェンシーのより高い段階である生徒主導の段階に移行し、生徒エージェンシーの発揮を目指した。また、分析を通して、本実践における生徒エージェンシー発揮の要因を明らかにすることを目的とした。本実践における生徒エージェンシーは、地域の健康課題に対するプロジェクトの充実を図るため、仲間や教師、地域の人と協働しながら、目標を設定し、振り返りを通して、責任をもってプロジェクトの計画や運営をすることができるようになることとした。		
II 実践方法		
1	対象生徒	本実践の対象者は、高等部第2学年の生徒6名である。 分析にあたっては、3名の生徒（以下、生徒A、生徒B、生徒C）を中心に報告する。この3名は学級での話し合いをリードしたり、同級生を支えたりしている。また、教師の支援なしでもワークシートの質問を理解して自分の言葉で記述できる実態がある。そのため、プロジェクト進行における話し合いやワークシートの記述に焦点にした本分析の対象として選定した。 生徒3名の実態を表1に示す。話し合いに焦点を当てているため、基本情報（性別、障害名、性格や特性）に加えて、話し合いに関する実態を記述した。
表1 選定した対象生徒の実態		
	基本情報（性別、障害名、性格や特性）	話し合いに関する実態
生徒A	・男 ・自閉スペクトラム症・注意欠陥多動症 ・こだわりが強い・負けず嫌い	話し合いの場面で中心的な存在であり、進行役を務めることが多い。自分の考えをしっかりと持ち、積極的に発表できる。一方で、自分の意見と異なる他者（生徒や教師）の意見を受け入れることが難しく、否定的な反応を示すことが多い。

生徒 B	・男 ・自閉症スペクトラム障害 ・優しい ・発言に消極的である	思いやりがあり優しい性格から、他の生徒の意見に共感する態度をよく示したり、困っている同級生に積極的に声を掛けたりする。指名されると自分の考えを明確に述べることができるが、同級生への遠慮や発言のタイミングを逃してしまうことから、自発的な発言が少ない傾向にある。
生徒 C	・男 ・自閉症スペクトラム ・優しい ・物事に丁寧に取り組む	教師や同級生の意見に共感して、意見に対する自分の考えを伝えることができる。積極的に自分の考えを述べることができる一方で、思い付いたことをそのまま言葉にする傾向があり、話がまとまらないまま伝えてしまうことがある。

2 実践の手続き

(1) 生徒主導の環境設定

- ・教師は授業の進め方を一方的に決定せず、生徒と共にプロジェクトを構築していく姿勢をもち、自らの意見を提案という形で示した。また、プロジェクトに関連する事柄はすべて生徒に相談・報告し、教師が独断で進めないようにした。
- ・プロジェクトの計画立案や振り返りなどの話し合いでは、生徒だけでは困難と思われる場面で教師が進行役を務めた。生徒が自ら進行できると判断した場面から、段階的に責任を委ねていった。
- ・計画書や報告書などを活用することで、生徒自身が目標設定や振り返りができる環境を整えた。

(2) 学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルの構築

- ・1年次に続き、学校と地域を学びの場とするため、地域と協働した学習活動を展開する必要があった。このため、令和4～5年の本校校内研究で明らかになった地域協働型学習の手法を参考に、地域との連携を進めた。
- ・生徒との話し合いを基にプロジェクトを実施する場所（学校や地域）を決定し、プロジェクトを複数回実践する機会を設定した。実践後の振り返り場面では、地域人材との協働がより良いプロジェクトにするための重要な方法であることを確認し、専門的知見を有する地域人材に相談する過程を取り入れていくことで、学びを生かすサイクルを構築した。
- ・教師は、生徒との話し合いで決定したプロジェクトの実施場所への協力依頼を担当した。まず、電話で依頼内容を伝え、承諾を得た後は現地を訪問した。担当者と直接打合せを行い、生徒がプロジェクトを実施するために必要な情報収集を行った。打合せ内容はすべて生徒に共有し、追加で生徒からの質問があれば教師が担当者に電話で確認するなど、地域と生徒をつなぐ橋渡し役を果たした。
- ・このプロジェクトは主に総合的な探究の時間で実施した。「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という探究の過程を、学校と地域という学びの場を生かしながら循環的に展開した。

(3) 学級で協働的な活動を促進するためのコーディネート

- ・個別に支援や配慮が必要な生徒に対して、学級全体でサポートする体制を整えるよう働き掛けた。集団活動の意義を明確に示し、困っている生徒がいる場合は全員で協力して助け合うという姿勢を共有した。
- ・生徒の実態に合わせて、話し合いで活動方針を決定するグループと、プロジェクトに必要な道具を

準備するグループに分けるなどのグループ編成を工夫し、生徒に提案した。このような生徒の特性を生かした活動設定により、全員が学級に貢献していると実感できるよう支援した。また、学級内で生徒一人ひとりの強みを確認し、それぞれに適した役割設定を検討した上で、効果的な役割分担を行う活動も取り入れた。

(4) 倫理的配慮

対象生徒が所属する特別支援学校は、在籍児童生徒の学びと成長を保障する他に教育実習や研究の場としての使命も担っており、事前に十分に説明した上で、保護者より研究協力及び成果公開の同意を書面で得ている。また、校内で個人情報の保護をはじめとする倫理的課題について十分に検討した上で本研究の実施と公開にあたっている。

3 単元計画（総合的な探究の時間）

(1) 単元名

「FTK健康プロジェクト」

(2) 単元の目標

- ① 地域の健康課題を解決するために必要な知識や技能を身に付けることができる。
- ② 必要な情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができる。
- ③ 主体的に同級生や教師、地域と協働して地域の方の健康増進に貢献するとともに、学んだ健康に関する知識を実生活に生かそうとする。

(3) 指導計画

	活動内容	教師の主な役割
1	・昨年度の振り返り ・今年度の取組について	・今年度のプロジェクトについて、昨年度に引き続き、「ボッチャ」を通して、地域の健康増進に貢献することを提案 ・地域でのボッチャ教室開催を目指し、参観日に来校する保護者に対してボッチャ教室を行い、練習することを提案
2	・ボッチャ教室（保護者対象）	
3	・振り返り ・対象者の検討	・録画映像を見て振り返る方法を提案 ・必要に応じて、話し合い活動を進行 ・ボッチャの競技特性などを踏まえた対象者を検討する重要性を提示
4	・対象者の決定 ・地域人材との協働について	・よりよいボッチャ教室にするために、昨年度に引き続き、地域のスポーツジムとの協働を提案
5	・スポーツインストラクターに相談	
6	・目標設定、準備	
7	・以降、決定した対象者へのボッチャ教室開催に向けての準備 ・取組をまとめて、地域のスポーツジムに報告	

※プロジェクトの展開が教師の案によるものか生徒の案によるものを明確にするため、指導計画には「教師の主な役割」として教師が生徒に提案した内容を明示した。

4 評価方法

(1) 共同エージェンシーのレベルの評価

共同エージェンシーのレベルとは、Roger A. Hart (1992) の梯子モデルや OECD 生徒フォーカスグループの生徒たちによる太陽モデルで示された、生徒の意思決定への参加段階を指す。太陽モデルは梯子モデルを参考に、エージェンシーの発達が行ったり来たりするような循環的な関係として表現できるよう作成されたもの (OECD, 2018) である。

本研究では太陽モデルを使用して共同エージェンシーのレベルの変化を評価した。1つの場面が複数の参加レベルに該当する可能性を考慮し、太陽モデルを採用した。表2には、木下ら (2000) の日本語訳を参考に作成された太陽モデルに基づく共同エージェンシーの段階 (OECD, 2018) を示している。

表2 太陽モデルに基づく共同エージェンシーの段階

(8) 生徒主導 (大人との対等なパートナーシップの下で意思決定を行っている)	生徒と大人との対等なパートナーシップの下で、プロジェクトが進められている。生徒がプロジェクトを主導し、意思決定は生徒と大人の協働で行われる。
(7) 生徒主導 (生徒主導による意思決定を行っている)	大人の支援を受けながら、生徒がプロジェクトを主導している。大人は相談を受けたり、生徒の意思決定を助けているが、全ての意思決定は究極的には生徒が行っている。
(6) 大人主導 (生徒も意思決定にかかわっている)	プロジェクトの主導は大人が行っているが、生徒も意思決定のプロセスに加わっている。
(5) 大人主導 (生徒にも情報は与えられていたり、意見が採り入れられたりする)	プロジェクトをどのように進めていくかについて、生徒は大人から相談されたり、その結果について知らされているが、プロジェクトの主導や意思決定は大人が行っている。
(4) 大人による指示 (生徒に情報は与えられているが、意思決定にはかかわっていない)	生徒は特定の役割を与えられており、どのように、また、なぜやるのかについて知らされている。しかしながら、そうした自分たちの位置づけについて、生徒が主導したり意思決定を行うことには参加していない。
(3) 見せかけ	大人が生徒に選択肢を与えているように見えるが、その中身や参加方法については、ほとんど、あるいは全く選択肢がない。
(2) 装飾	大人が自らの主張を強化するために、生徒を利用している。
(1) 操作	生徒主導であるかのように、大人が生徒の主張を利用している。
(0) 沈黙	大人も生徒も生徒が貢献できるとは考えておらず、大人が全てを主導し、全ての意思決定を行う一方で、生徒は沈黙している。

分析方法について、実践初期と実践後期のプロジェクトの方向性を検討する話合い場面を比較した。この話合いの段階が、共同エージェンシーに関連する生徒の行動を効果的に確認できると判断し、場面を選定した。実践初期と実践後期の授業を録画し、できるだけ同じテーマの話合い場面を比較できるよう、録画映像から比較対象となる場面のみを抽出した。場面の抽出は、エピソード記述 (鯨岡, 2005) を使用した。エピソード記述とは、保育や福祉現場における記録の方法論である。実践現場に身を置いて、実践者が印象に残った場面をエピソードとして取り出し、実践者の興味・関心との関連を見出し、「メタ意味 (その出来事の表面の意味を越えた意味、あるいはその奥

の意味)」を提示するものである。実践初期と実践後期の話し合い場面を「背景」、「エピソード」、「メタ観察」の3つの構成で記述した。エピソード記述からどの共同エージェンシーのレベルに該当するのか、実践グループメンバーで協議して検討した。

(2) 生徒エージェンシーの評価

OECD が定義する生徒エージェンシーの「変化を起こす」力に着目し、「自分を変える力（内的）」と「外の状況を変える力（外的）」という二つの側面から、(1) で抽出した授業場面や生徒の記録物（ワークシート）を分析対象として、どのような行動であったか、実践グループメンバーで協議して解釈した。生徒の記録物は、以下の2つを対象とした。

① One-minute paper (以下、OMP)

Angelo & Cross (1993) が開発した評価ツールで、高等教育でよく使われる振り返りワークシートで、「今日の活動について」の振り返りを授業終了時に約1分で行う活動である。OMP の内容は安井ら (2021) を参考に表3のように作成し、話し合いのある授業の振り返り時に実施した。

表3 One-minute paper の内容

今日の話し合いのめあては達成できたと思いますか。	
今日の話し合いを進めるために、自分にできたことはどのようなことですか。	

② ボッチャ教室の目標設定及び振り返りのワークシート

ボッチャ教室について実施前後に記入されたワークシートである。全3回の実践において、「ボッチャ教室に向けた個人の目標」と「ボッチャ教室の成果とレベルアップしたいこと」について記述する内容である。

Ⅲ 指導の実際

実践のスケジュールを表3に示した。図1は、本実践の展開をイメージ化したものである。

表3 実践のスケジュール

実施日	活動内容	備考
1	4/22	・プロジェクトの方向性の検討
2	4/24	・目標設定
3	4/26	・ボッチャ教室（保護者対象）
4	5/15	・振り返り
5	5/22	・地域協働に向けて
6	5/27	・地域のスポーツインストラクターに相談
7	5/29	・地域協働の振り返り
8	7/1	・目標設定
9	7/4	・ボッチャ教室（小学部児童対象）
10	7/7	・振り返り
11	7/14	・目標設定
12	7/14	・ボッチャ教室（高齢者施設利用者対象）
13	7/17	・振り返り
14	7/22	・プロジェクトの方向性の検討

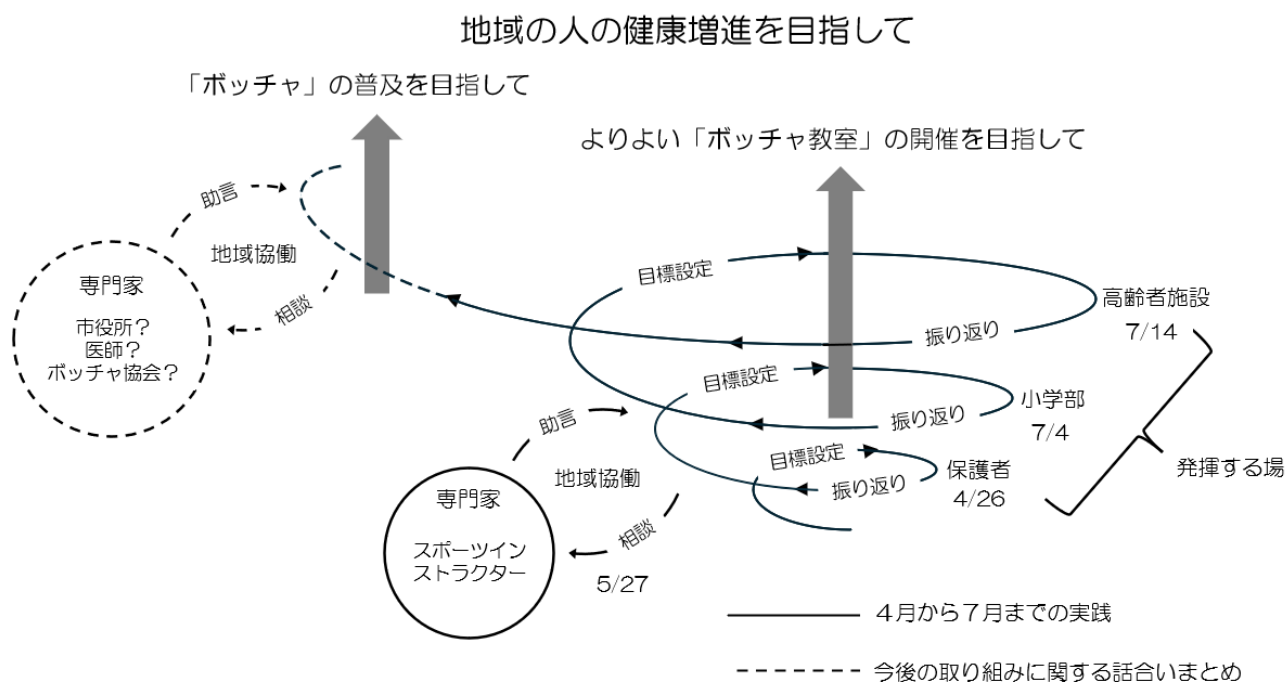


図1 本実践の展開

以下が実践のまとめである。

単元の初めに、昨年度地域のスポーツジムと協働して実施した地域の人の健康増進を目指した取組を振り返り、課題の設定を行った。教師からボッチャ教室の開催を通じて地域の人の健康増進を目指す方法を提案し、生徒の賛同を得た。将来的には地域の人にボッチャ教室を開催することを見据え、まずは保護者や児童生徒を対象に段階的によりよいボッチャ教室にしていくことを決めた。対象者については、ボッチャの「誰でもできるスポーツ」という特性から、高齢者に焦点を当てた。高齢者との関わり方やボッチャ教室開催時の注意点は、スポーツインストラクターに相談し、高齢者施設でのボッチャ教室に臨んだ。7月の振り返りでは、よりよいボッチャ教室を目指すための検討だけでなく、取組の方法にも目を向けた。不健康な人の特徴として、運動への苦手意識や抵抗感がある人が多いことを予想し、取り組みやすいボッチャを地域で普及することで、より多くの地域の人の健康増進につながると考えた。そこで、ボッチャ普及のための効果的な対象者選定や地域人材との協働について話し合いを行った。

以下にボッチャ教室及び地域のスポーツインストラクターに相談した授業の実際の様子を示した。

4月26日 第1回ボッチャ教室（保護者対象）

教師が提案した「地域の人々の健康のためにボッチャ教室を開催する」という第1回目のプロジェクトを実施した。最初は練習として、参観日に保護者を対象にボッチャ教室を行った。生徒たちは学級で決めたそれぞれの役割を果たし、ボッチャ教室を円滑に運営した。対象者が保護者だったため、多くの生徒が安心感をもってリラックスしながら活動することができた。



図2 4月26日の様子

5月27日 地域のスポーツインストラクターへの相談会

昨年度協働した地域のスポーツジムの店長が転勤となり、新たな店長との相談会を実施した。相談会は二部構成で、前半は新店長との顔合わせ、後半は7月14日に決定した高齢者施設の利用者を対象としたボッチャ教室の質の向上について相談した。事前に生徒から質問を集め、店長に回答を準備していただいたことで、人に教えることや高齢者との適切な関わり方について、実演を交えながら学ぶことができた。店長からは、「ボッチャ教室で地域の人々の健康に貢献していきましょう」、「一緒に地域の人々の健康増進に取り組んでいきましょう」という意見をいただいた。



図3 5月27日の様子

7月4日 第2回ボッチャ教室（小学部児童対象）

生徒の意見を取り入れ、本校小学部の児童向けボッチャ教室を開催した。第1回からの振り返りと数多くの話し合いを通して、学級で決めた服装や必要な表示物、名札、参加証などを準備して開催に臨んだ。実際の活動では、ほとんどの生徒が地域のスポーツインストラクターから学んだ教え方や関わり方を意識して行動していた。参加児童からは「楽しかった」、児童の学級担任からは「丁寧に関わってくれた」、「みんなが同じように活動できるボッチャはとても良い選択である」などの意見が寄せられ、これらの感想を生徒たちと共有した。



図4 7月4日の様子

7月14日 第3回ボッチャ教室（高齢者施設利用者対象）

地域の高齢者施設を訪問し、高齢者を対象としたボッチャ教室を開催した。高齢者施設では、コロナ禍前まで地域の小学校との交流を行っていたが、今回がコロナ禍後初めての外部との交流となり、多くの職員や利用者が楽しみにしていた。準備段階では、高齢者に適した大きなボッチャの的が必要だという生徒の意見を受け、教師が他校から借用して開催に備えた。当日は第2回目の経験を生かし、生徒たちだけで教師の支援なしに全体の進行を運営することができた。参加者からは「元気をもらった」、「楽しかった」、担当者からは「また来年お願いしたい」という意見が寄せられ、これを生徒たちと共有した。



図5 7月14日の様子

IV 結果

(1) 共同エージェンシーのレベル

実践初期と実践後期に行われた授業から抽出したエピソードが、どの共同エージェンシーのレベルに該当するのかを太陽モデルを参考に実践グループメンバーで協議して検討した。結果を表4に示す。実践初期から実践後期にかけて、共同エージェンシーのレベルが上がったという解釈となった。(エピソードは、別紙1、2参照)

表4 共同エージェンシーのレベル

実施日	該当レベル	理由
実践初期 4月22日	・「(5)大人主導（生徒にも情報が与えられたり、意見が採り入れられたりする）」 ・一時的に「(6)大人主導（生徒も意思決定にかかわっている）」 ・「(1)操作」「(2)装飾」「(3)見せかけ」の捉え方もできる	・教師が「ボッチャ教室」を通してプロジェクトに取り組むことを生徒に提案・相談している。生徒がプロジェクトの意思決定の場に参加しているが、最終的には教師の意見が採用されプロジェクトが決定した。 ・ただし、生徒Aが「学校の児童生徒」にも実施するという意見を出した場面では、一時的に教師が主導しながらも、生徒が意思決定プロセスに参加していたと捉えられる。 ・教師の提案が既に実施される見込みが高いもので、生徒の意思決定は形式的なものに過ぎない可能性がある。提案に対して、生徒が反対した場合の展開も考えられる。
実施後期 7月22日	・「(6)大人主導（生徒も意思決定にかかわっている）」 ・「(7)生徒主導（生徒主導による意思決定を行っている）」の段階に進む可能性あり	・生徒Aの「他の学校の人とやりたい」という提案に対して、教師自ら地域課題を振り返ったことで生徒の発言の受け止め方が変化し、その受け止め方を生徒に共有して、新たな目標設定に至った。 ・教師は依然として主導的立場にあるものの、生徒の意見を中心に進めようとしている。 ・生徒Aは地域人材との協力も視野に入れており、教師や地域人材へ相談する展開が考えられる。

※全体を通しての解釈：「生徒によってレベルが異なる」、「生徒A、B、C以外は、同級生や教師にアドバイスされたことに取り組むことが多いため、意思決定できているか不明確な点がある」

(2) 「自分を変える力 (内的)」と「外の状況を変える力 (外的)」の分析

OECD が定義する生徒エージェンシーの「変化を起こす」力に着目し、「自分を変える力 (内的)」と「外の状況を変える力 (外的)」という二つの側面においてどのような行動であったか、実践グループメンバーで協議して解釈した。結果を以下に示す。

① OMP「今日の話合いを進めるために、自分にできたことはどのようなことですか。」

＜生徒 A の記述＞

日にち	記述内容
5月19日	考えながら話合いを進めることができました。
5月23日	ポッチャ教室のことについて、話合いができました。
6月4日	名札づくりや的を2つ使うなどの意見を出すことができました。
6月11日	高齢の人にやさしく接する意見を出しました。
7月1日	同級生の話を聞いたことが良かったです。
7月7日	同級生が自分の意見を聞いてくれて、賛成してくれました。
7月14日	地域の人(スポーツインストラクター)から聞いたことを目標にできたと思っていて、それを意識して取り組みたいです。
7月22日	みんなで話し合うことができました。

＜解釈＞

実践後半から、振り返りに他者への言及が現れ、変化があった(内的)。この記述は、自立活動で取り扱った内容を生かした記述であった。

＜生徒 B の記述＞

日にち	記述内容
5月19日	自分の良かったところやレベルアップしたいことを見つけながら、振り返りできました。
5月23日	自分の意見を言うこと。まわりの意見をしっかり取り入れること。
6月4日	同級生の意見を取り入れること。
6月11日	同級生の意見を取り入れて、ストレッチの内容をまとめたこと。
7月1日	自分の意見を言うことができました。
7月7日	
7月14日	自分の意見を1つ言うこと。同級生の意見を大事にする(否定しない)こと。
7月22日	同級生の意見を取り入れること。

＜解釈＞

普段は自発的な発言が少ない傾向があるが、他者の意見を聞くだけでなく、自ら積極的に意見を表明することができたという振り返りが記述された日があった(内的)。14日の記述は、具体的に振り返りが記述された。これらの記述は、自立活動で取り扱った内容を生かした記述であった。

＜生徒 C の記述＞

生 徒	日にち	記述内容
	5月19日	思い付いたことを自分から話して進められました。

C	5月23日	いろいろなアイディアを考えながら話を進めました。
	6月4日	自分から考えてうまく話を進めることができました。
	6月11日	自分の作戦をみんなに話していった進めることができました。
	7月1日	自分の考えを伝えつつ、相手の話もよく聞きました。
	7月7日	自分自身を見つめることができました。
	7月14日	自分の考えを相手に伝えつつ、相手をフォローしました。
	7月22日	自分の考えを伝えつつ、相手の話を聞くことができました。

<解釈>

実践後半では、自分の考えを伝えるという振り返りだけでなく、同級生の意見を聞くことができたという振り返りも記述されるようになった（内的）。

② ボッチャ教室の振り返りに関するワークシート

<『次回の活動でレベルアップしたいこと』の記述>

A	第1回（保護者対象） 振り返り時	試合で使う道具を準備する。
	第2回（小学部対象） 振り返り時	スムーズにできるように取り組んでいきたいです。
	第3回（高齢者対象） 振り返り時	ボール拾いをみんなに任せてしまいました。
B	第1回（保護者対象） 振り返り時	・参加者に自分から声をかけていきたいです。 ・まわりをよく見たいです。 ・何を言いたいのかまとめておくことが大事だと思いました。 ・姿勢を良くして見守ることが大切だと思いました。
	第2回（小学部対象） 振り返り時	少しボールを回収するタイミングが早かったです。次はタイミングをしっかりと見ながら役割をこなしたいです。
	第3回（高齢者対象） 振り返り時	同級生にわかりやすく教えられるように頑張りたいです。
C	第1回（保護者対象） 振り返り時	話す言葉を直したいです。
	第2回（小学部対象） 振り返り時	教え方をさらに磨きたいです。
	第3回（高齢者対象） 振り返り時	別の役割にも挑戦していきたいです。

<解釈（第3回の記述を中心に）>

生徒 A について

→ボッチャ教室の目標設定時、生徒は1人で「ボール拾い」という役割ができると主張し、教師や同級生との役割分担の案に否定的だった。しかし当日、生徒 A には他の役割があり、結果的に同級生が手伝うことになったという背景がある。この経験は、「同級生と協力することで目標が達成できた」という認識に至る可能性があり、他者との協働に関する行動の変化（外的）に期待できる。

生徒 B について

→振り返りの焦点が自分の役割から同級生へのサポートへと変化した（内的）。この変化により、今後の活動では困っている同級生をサポートするという行動の変化（外的）が期待できる。

生徒Cについて

→自分の現在の役割について振り返るだけでなく、新たな役割に挑戦したいという前向きな姿勢へと変化した（内的）。

③ 実践後期の話し合い場面（7月22日）

＜抽出したエピソード：ポッチャをどこに普及するべきかの話し合い場面＞

A：b) 私的には「(地域の高等学校1)」や「(地域の高等学校2)」の高校生に教えたいなあと思っています。私、「(地域の高等学校1)」の3年生に知り合いがいて、この人にも教えられたらと思いました。

C：a) どうして、そこにしたいのかという理由も考えないとね。僕は、附属小学校の子たちはルールを理解してくれる人が多いかなと思って。

B：そういう子たちが良いね。

C：小学校高学年だと、そういう子が多いかなと思って。

A：なるほど。Bはどうですか。

B：そういう子たちに、こういう運動があるんだと教えに行く。

A：b) なるほど、私的には高校生だと将来大学に行く人も多いと思うし、大学生はボランティアしてくれる人が多いと思うし、それを高校生に勉強していただきたいと思ひまして。

c) まずは、ルールを覚えていただきたい。ポッチャ協会があって、よりよく分かった方にも協力してもらうのもよいと思ひました。

＜解釈＞

a) について

→生徒Aの不明瞭な意見に対して、理由を述べる必要性を伝えた（外的）。

b) について

→生徒Cの発言を聞いた後、自分の言い方を見直し（内的）、同級生により分かりやすく伝え、自分の意見に共感し納得してもらえるよう（外的）工夫した行動であった。

c) について

→以前の活動では見られなかった新しい発言であり、生徒がプロジェクトの目的達成のために地域との協働を視野に入れるようになった（内的）という変化を示す行動であったとともに、今後、地域人材に依頼する方向に進んだとき、地域人材の行動を変えてくれる（外的）可能性が期待される意見であった。

V 考察

本実践は、1年次に継続して、学校と地域を学びの場とした、学びを生かすサイクルを展開することで、共同エージェンシーのより高い段階である生徒主導に移行し、生徒エージェンシーが発揮されることを目指した。分析を通しては、生徒エージェンシーが発揮される要因について検討することを目的とした。

1 共同エージェンシーのレベルについて

実践後期の授業で、生徒Aが「他の学校の人とやりたい」と提案した際、教師は自ら地域課題を振り返り、生徒の発言に対する受け止め方を変化させられた。この新たな視点を生徒と共有し、目標設定につなげたことで、生徒の意見を中心とした話合いが進展するきっかけとなった。以上から、実践初期と比較して、共同エージェンシーのレベルが向上した話合いが展開されたと実践グループで解釈した。

OECD は共同エージェンシーについて、生徒だけでなく教師を含む学校コミュニティ全体を学習者として捉える視点を示している。教師自身も積極的な学びの主体となり、他者の判断に左右されずに責任をもって学習目標を設定し、振り返りながら学びを進める「教師エージェンシー」(OECD, 2018)の発揮が求められている。

本実践における教師の行動は教師エージェンシーの発揮に関連しており、共同エージェンシーのレベル向上の一要因として影響を与えたと考えられる。

2 生徒エージェンシーの発揮

(1) 「目標設定」や「振り返り」の場面

ボッチャ教室の振り返りワークシートでは、生徒Bと生徒Cが第3回目の振り返りで、自分の役割以外の新たな視点をもつという「内的」な変化を示した。また、実践後期の話合いでは、生徒Aが地域の人の健康促進のためにボッチャを普及させる際、正確な情報を伝達するためにボッチャの専門家との協働を提案した。このような提案は以前の実践では見られず、生徒がプロジェクトの目的達成のために地域人材との協働を視野に入れるという「内的」な変化を表していると解釈された。

これらの変化は「目標設定」と「振り返り」の場面で生じていることから、生徒エージェンシー「目標を設定し、振り返り、責任ある行動をすることによって変化を起こす力」の発揮に関連した行動であると考察する。

行動の背景として基盤となる要因は、「目標設定」と「振り返り」の時間が明確に設定され、繰り返し行われていることだと考えられる。これは本実践における「学びのサイクル」-学びを実践し、振り返り、次の目標を設定するという一連のプロセス-によって支えられている。このサイクルがなければ、こうした行動は発現しなかったと考える。

(2) 話合い場面

実践後期の話合い場面で、生徒Cが生徒Aに対して発言したことをきっかけに、生徒Aは自分の発言を振り返り、同級生に分かりやすく伝えるために表現を修正した場面だったと解釈したと考えられる。

この変化は、話合いの場で瞬時に自分の発言を「振り返り」、目的達成のための「責任ある行動(発言)」をとったことから、生徒エージェンシーの発揮に関連する行動であると考えられる。

行動の背景には、OMPでの生徒Aの振り返りの変化が関連し、周囲が自分の意見を聞いてくれた経験や、他者の視点から考えた経験が、この瞬時の振り返りと責任ある行動につながる要因の1つになったと考えられる。また、生徒Cの役割も重要な要因であったと推察される。共同エージェンシーは相互支援の関係性であり、共通目標に向かう生徒の成長を支えるものである。生徒Cなどの

周囲の行動は、生徒Aの生徒エージェンシー発揮を支える共同エージェンシーにつながるものだった。以上より、共同エージェンシーが生徒エージェンシーの発揮の一要因であると考えられる。

3 本実践のまとめ

教師エージェンシーの発揮を一要因とする共同エージェンシーのレベル向上が確認された。また、生徒エージェンシーの発揮に関連する行動が確認され、学びを生かすサイクルや共同エージェンシーによって促進されたと考察する。

4 今後の課題

エピソード記述から明らかなように、対象学級の話合いでは生徒Aの発言が大部分を占めていた。生徒Cが生徒Aの行動に影響を与える場面もあったが、生徒Aが他者の意見を受け入れず、自分の意見だけで話合いを進行させる場面も見られた。一方で、OMP記述の分析からは、生徒Aが他者への言及を含む振り返り（「内的」な変化）へとつながったことが確認できた。また、ボッチャ教室の振り返りワークシートでは、生徒Aが他者との協働に関する行動変化（「外的」な変化）を示唆する記述も見られた。これらの変化は、自立活動の目標に沿った行動の表れとして解釈された。生徒エージェンシーの発揮を目指した取組で自立活動の成果が見られたことから、何らかの関連性があることは明らかである。自立活動は、「個々の生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達を基盤を培う」学習であり、エージェンシーの発揮においてもこの自立活動による指導が重要な役割を果たす可能性がある。本実践を継続するにあたっては、自立活動による個別の指導を基盤としながら、生徒がエージェンシーを発揮できるような支援を行っていく必要がある。

VI 参考・引用文献

- ・白井俊（2020）OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー、資質・能力とカリキュラム。ミネルヴァ書房。
- ・OECD: OECD Future of education and skills Education 2030, 2018. （2025年4月30日取得, https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf）
- ・文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説「総合的な探究の時間編」。
- ・弘前大学教育学部附属特別支援学校（2024）地域の人たちとの社会的相互作用でアップデートする子供の学び。弘前大学教育学部附属特別支援学校研究紀要 24。
- ・Hart A. Roger. (1992), Children's Participation: From tokenism to citizenship, Innocenti Essays No. 4, UNICEF.
- ・ロジャー・ハート(著), 木下勇(監), 田中治彦(監), 南博文(監), IPA(子どもの遊ぶ権利のための国際協会)日本支部(訳)(2000) 子どもの参画 - 子どもの参画 - コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際。萌文社。
- ・鯨岡峻(2005)エピソード記述入門 実践と質的研究のために。東京大学出版社。
- ・Angelo, T. A. & Cross, K. P. (1993) Classroom Assessment Techniques: A Handbook for College Teachers (2nd ed.) . San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- ・安井一郎, 林尚示, 鈴木樹, 眞壁玲子, 元笑予, 下島泰子. (2021) 特別活動で The OECD Learning Compass 2030 の Agency とコンピテンシーの発揮を図るための指導方法—小学校学級活動(1)を事例として. Mathesis Universalis Volume 23, 1.
- ・文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）

<背景>

本実践の初回となる授業であった。授業の初めは、昨年度の地域のスポーツジムの健康イベントに協力する形で行なったプロジェクトを振り返り、今年度は地域の人々の健康増進を目指して、自分たちが中心となることができることを考えていこうとテーマを提示した。自分たちにできることを学級で考えるなど、生徒主導を目指した次なる展開を考えていたが、授業時間が限られていることや昨年度の積み重ねを生かしたプロジェクトは見通しをもって活動に取り組みやすいことを考慮して、昨年度に引き続き、ポッチャ教室を通して地域の人々の健康増進を目指すことを提案する展開にした。

<エピソード> ※教：教師、A～C：対象生徒、D～F：他3名の生徒

教：今年度もポッチャを通して、地域の人々の健康のために活動してみませんかという提案です。そして、昨年度と同じポッチャ教室を自分たちで開催するのですが、まず、保護者にやってみませんか。最初、地域の人に実践する前に練習が必要だと思っていました。今週、参観日があるので、そのときに練習としてやってみませんかという提案です。

D：いいです。

A：僕は、親とかだったら前に教えたじゃないですか。ですから、ルール全般は分かっていると思いますので。だったら、やらなくていいんじゃないかなと思います。それよりだったら、生徒にやる方がいいんじゃないかなと思います。小中とか。

C：自分なんですけど、練習としてはありなんじゃないかなと思います。

教：Cさんは練習として、保護者の方に協力してもらおうということかな。

C：お客さん役をしてもらおうという感じですね。

教：練習だからということね。

A：それだったら、親は教えなくていいんじゃないですか。

教：それがAさんの意見だね。Bさんはどうですか。

B：練習としてなら別に良いと思います。

教：練習としてなら良いということね。Bさんの保護者は（昨年度のポッチャ教室に）来てなかったよね。

A：Bさんのお母さんだったらね、いいんじゃないですか。Eさんの親もじゃないですか。

教：来てなかった親のことかな。

A：はい。来てない親に教えるのはどうですか。

教：私も来てないけど。

A：じゃ、教えてあげないと。

C：じゃ、思ったんですけど、来た人にももう一回教えてもいいんじゃないかなと。

A：自分と自分の親はもう十分ですので。

教：親はそう思っていないんじゃない？

A：いや、もうバレバレです。

教：Eさんどうですか。

E：よいと思います。

教：Fさんはどうですか。

F：よいと思います。

教：みなさんから意見聞きましたが、（ポッチャ教室を参観日に）やる方向で良いでしょうか。ただ、Aさんの言う通り、1回（ポッチャ教室に）参加した保護者の方もいますので、その方はどうするのか、後

で考える場面がありますので、そのときに考えていきましょう。イメージは、こんな感じです（スライドを見せながら）。最初は、保護者の人にボッチャ教室を行い…。

A：（言葉に被せて）じゃ、次に学校の児童生徒で、その次に地域の人はどうですか。

教：先生は、回数を繰り返すことで地域の人によりよいボッチャ教室を開催できると考えたので良いと思います。あとは皆さんが賛成してくれるのであれば、先生は良いと思いますよ。

A：あとは小中高混ざって交流する。一体、二体を使ってみたいな。あまり分からなそうな人には簡単に説明する。何か誰かはできそうな気がします。そして誰かが審判するみたいな。

教：今、たくさん意見出してくれましたね。そこをみんなで話し合っていかなければいけませんね。さっきの続きですが、今週保護者を対象に行なって、徐々に地域の人に広げていきませんか。そして、Aさんが言ってくれた学校の皆さんにもやっていきませんかという提案ですが、皆さんどうでしょうか。（以下、省略 ※他の生徒の賛成を受けて、その後、次に必要な話し合いが展開された）

<メタ観察>

生徒 A は教師や他の生徒からの提案に対して否定的な応答をすることが多く、学校生活でよく見られる行動だった。教師は「生徒 A の意見なんだね」と受容的な態度を示すものの、通常は他のほとんどの生徒が生徒 A の提案に賛成し、多数決によって提案が採用される流れとなっていた。この状況を校内研究の実践授業でどう扱うべきか難しい課題であり、本授業でも教師を悩ませた。結果としては、これまでと同様の展開となり、教師の提案が学級全体に受け入れられることとなった。ただし、授業後半の生徒 A の意見に対して、教師はその提案が目標達成に必要なプロセスだと理解して賛成し、他の生徒にも提案する流れとなった。

<背景>

夏休み前最後となる授業であった。授業の初めは、4月から始めたプロジェクトのきっかけやこれまでの取組、成果や課題を生徒に指名しながら全体で確認した。その後は、夏休み明け以降のプロジェクトの進め方について全体に問い掛け、生徒の意見に応じて、授業の展開を柔軟に変更しようと考えていた。成果や課題の確認が終わった直後、これまでプロジェクトの中心的役割を担ってきた生徒Aが、過去の話合いでも何度か話していた意見を発表した。

<エピソード> ※教：教師、A～C：対象生徒、D～F：他3名の生徒

A：他の学校の人とやるのはどうだろうと。

教：何でボッチャ教室の参加者をお年寄りにしたかということ、一番地域の人の中で運動する機会が少ない。

例えば、みんなは体力づくりとして、毎日運動している。ご高齢の人は、やっているかということそんな感じには見えない。だから参加者に決めた。ただ、Aさん言ってくれた通り、他校の人とやることでボッチャを普及できる面で良いと思いますよ。

A：普及プロジェクトもありだと思います。

教：ボッチャを広めようプロジェクトだね。昨年度、スポーツインストラクターから（地域の人の健康のために協力しよう）話があって、地域の健康課題があって、地域の人の健康のためにやっているプロジェクトでした。ただ、先生は普及に興味ありますよ。

A：健康普及プロジェクトはどうでしょうか。

教：ボッチャ普及健康プロジェクトかな。健康とは別で普及が目的になれば、幼稚園や学校での実施は良いと思いますよ。

A：やりませんか、普及。

教：Aさんはそういう意見なんだね。

A：それを他校の人にやるみたい。あくまでも案ですが、「（地域の高等学校名）」ならいけそうな感じがしてまして。

教：まずAさん意見言ってくれてありがとうございます。皆さんはどう？これまで健康に注目して取り組んできましたが、ボッチャの普及という目的も入れて、健康についても広めていく活動はどうかという意見でした。

B：一石二鳥ですね。

A：Bさんの意見は共感できますね。

教：どうですか、皆さん。

C：大丈夫です。

D：大丈夫です。

教：Eさんどうですか。

E：良いと思います。

教：Fさんどうですか。

F：良いと思います。

教：みんな賛成ということですが、プロジェクトの名前が変わりそうなのかな。ボッチャの名前は入るのかな。

A：健康ボッチャ普及プロジェクトとか。

教：（板書を見て、独り言のように）確かにな。元々の課題これでしたよね（板書した課題を指して）。地域

の中で健康ではない人が多いということ。健康ではない人って、運動しなそうな人多そうじゃない？

A：しなそうですよね。

教：そういう人にでも、簡単にできる、誰でもできるポッチャを広めたら、確かに健康になる人が増えそうだな。面白いかもしれない。

A：まあ、あるかもしれませんが。他の学校に広めるとかは。あくまでも例ですけど、みんなでスタッフ〇〇と書いて。他の人にはテープとかになるんじゃ。

教：人数の問題ということですね。

A：はい。

教：規模の問題はこれから考えていかなければいけないですね。

A：はい。

教：Aさんが学校という意見を出しましたが、参加者を誰にするかも考えなければいけないですね。

A：体育系の人に教えたいというか。

教：それはなぜですか。

A：理由としましては、運動する機会がありますし、何か教えられそうな予感がある。

教：運動している人がさらに周りに普及させるということね。

A：はい！

教：確かに自分たちで広めるには、人数や時間が限られてくるから難しいよね。今回の高齢者施設訪問も、限られている人たちだけにポッチャ教えましたよね。そうしたら、どのように誰に普及していくか、中心になって進めてきた3人で話し合いをしてみるのはどうですか？

A：分かりました。

教：残り15分程度で、このテーマについて話し合ってください（板書を指して）。大事にして欲しいのは、どうしてその人に教えたいのかという理由を大事にしてください。例えば、Aさんが言ってくれた運動が得意そうな人に教えることで、さらに周りの人に広めることができると思うからとかかな。理由を確認して話し合ってください。

A：分かりました。

教：他3人は、先生とこれまでの実践をまとめる報告書を作りましょう。

その後、生徒A、生徒B、生徒Cは机を付けて、生徒Cの発言から話し合いが始まった。

C：附属小学校はどうかな。

A：できれば、高学年が良いのかもしれませんがね。

C：5年生とか6年生とかだね。

A：いいかもな。Bは、誰が良いとかありますか。

B：どこかの小学校高学年は良いと思う。

A：私的には「（地域の高等学校1）」や「（地域の高等学校2）」の高校生に教えたいなあと考えています。私、「（地域の高等学校1）」の3年生に知り合いがいて、この人にも教えられたらと思いました。

C：どうして、そこにしたいのかという理由も考えないとね。僕は、附属小学校の子たちはルールを理解してくれる人が多いかなと思って。

B：そういう子たちが良いね。

C：小学校高学年だと、そういう子が多いかなと思って。

A：なるほど。Bはどうですか。

B：そういう子たちに、こういう運動があるんだよと教えに行く。

A：なるほど、私的には高校生だと将来大学に行く人も多いと思うし、大学生はボランティアしてくれる人が多いなと思うし、それを高校生に勉強していただきたいと思ひまして。まずは、ルールを覚えていただきたい。ポッチャ協会があつて、よりよく分かつた方にも協力してもらつうのも良いと思ひました。

<メタ考察>

生徒 A は以前から他の高等学校に知り合いがいて、その人たちにポッチャを教えたいという気持ちを話していたため、「他の学校の人とやりたい」という発言は個人的な思いからきていると教師は理解していた。そこで、生徒が自分の考えを振り返るきっかけとなるよう、学級で話し合つて決めてきた高齢者を対象としたプロジェクトの意図や、きっかけとなつた地域の健康課題を伝えた。同時に、生徒の考えを尊重する必要性も感じ、ポッチャ普及の可能性を示した。しかし、生徒 A は「普及」というキーワードを使って新しいプロジェクトを提案した。教師はこの提案がこれまでの取組と異なると感じつつも、その案に興味を覚えていることに気付いた。コーディネーターとして学級全体に意見を伝え、全員の反応を聞いた結果、生徒 A の提案が採用されそうになつた場面で、改めて地域の課題を振り返つた。すると、生徒 A の意見が地域の人の健康につながる取り組みであることに気づき、その気づきを全体に伝えた。また、生徒 A が「他の学校」から「体育系の人」へと意見を変えたことに驚きを感じた。生徒同士で話し合う場を作ることにより新たな意見が出ることを期待し、中心的に進めてきた生徒 A、B、C が話し合える時間を設定した。他の 3 名の次の活動を支援しながらも、話し合いに耳を傾け、必要なサポートを行う展開にした。